国際会議等参加旅費補助金報告書

2010 年　　5 月　　31 日
（西暦で記入のこと）

日本心理学会理事長　殿

所属機関・職名
筑波大学大学院・人間総合科学研究科・心理学専攻

氏　　名　　鈴木　高志

下記のとおり国際会議参加旅費補助金の使用報告をいたします。

会　議　名　称 ※正式名称および 日本語訳	The Fourth International SDT Conference 第四回　国際　自己決定理論　学会
公式ホームページ URL	http://www.psych.rochester.edu/SDT/conference/index.php
開　催　期　間	2010 年　5 月　13 日　～　2010 年　5 月　16 日
旅　行　期　間	2010 年　5 月　12 日　～　2010 年　5 月　19 日
開　催　場　所 (国･都市･会場) ※現地名綴りおよび 日本語表記	Ghent University in Ghent, **Belgium** ベルギー王国・ゲント・ゲント大学
発　表　者　氏　名 ※全員の名前と所属 日本語表記	鈴木高志（筑波大学大学院）・櫻井茂男（筑波大学大学院）
発　表　題　目 ※正式名と日本語訳	The effects of extrinsic goal over the career motivation in Japanese early adolescents ※　the origin of “dark side” of Japanese Dream?-
補　助　金　額	139,910 円　（内訳　航空券 117,810 円＋学会費 22,100 円 ）

1　会議プログラムの発表者氏名・題目が記載されたページのコピーを添付して下さい。

2　申請書に記した事項とこの報告書で事項に相違のある場合（旅行期間や発表題目の変更など）は、その旨を該当事項欄に明記して下さい。

国際会議等参加報告書

1. 会議の全体的状況に関する件

今回、旅費助成をいただき参加した国際会議は、Deci, E. L. および Ryan, R.M.が中心となって理論的基礎を築いた、自己決定理論に関する学会であった。世界中から同じ理論を共有する研究者が今回の会場となったベルギーのゲントに集参した形となり、非常に中身の濃い議論が出来たため収穫が大きかった。前回のトロントのカンファレンスと比較しても、参加人数が倍となっている旨主催者より発表があったほどの盛会であった。

2. 報告者の発表に関する件

報告者の今回の発表は、日本の中学生を対象にした調査の結果によるもので、趣旨は以下の２点であった。すなわち、第一に、中学生の外発的目標（名声や金銭的成功を追求する人生目標）は、すでに具体的な志望職業名に具体化されて意識されていること、第二に、にもかかわらず、外発的目標はキャリア教育への動機づけには全く結びつかないこと、であった。

当日アクシデントがあり発表場所が急きょ移動となったにも関わらず、1時間半ほどの発表時間に10名ほどの研究者に足を止めていただき上記の結果を説明することができた。その中でも、不適応的な外発的目標がすでに職業名と結びついて中学生に強く意識されているとするならば教育上どのような配慮をすべきか、との質問を受けたのが印象的であった。また、自己決定理論でよく取り上げられるもう一つの目標である内発的目標（自己実現や社会貢献を追求する人生目標）と、外発的目標との関連につき、両目標の単独の効果（主効果）のみならず両目標の干渉や相補的関係（交互作用）に注目してはどうか、等の大変示唆に富む意見もいただくことができた。今後はこの点も踏まえて、自分の研究にあらたな視点を加えることといたしたい。

3. 関連領域における新しい動向に関する情報収集に関する件

報告者の主に研究している目標理論は、自己決定理論の中での一領域として位置づけられている。今回のカンファレンスにおいて、目標理論があらためて自己決定理論の中の枢要な一部としてとりあげられ、その新しさから脚光を浴びていることを他の研究者の発表から感じることができた。このことは最近の掲載論文の動向から予想されていたこととはいえ、実際に様々な研究者の発想に「生で」ふれることにより、改めて直接的に感じられたことは大きな収穫であった。

また、報告者は、日頃研究する中で、目標理論の背景に価値意識あると考えていたが、今回のカンファレンスにおいて複数の研究者が価値観と目標理論とを結び付けて理論化を試みていることが分かり、自分と同じ発想を他国の心理学者がしているのだ、と意を強くすることができた。

さらに、自己決定理論全体でいえば、それら研究者の発想が非常に自由度の高いものであることも驚きであった。たとえば、報告者が全く別次元の概念ととらえていた変数同志の交互作用を検討したり、また分析においても報告者が通常使用しないような統計手法で主張する結果を浮き彫りにしたり、といった点で「とらわれない」発想の伸びやかさを感じることができた。

4. 最後に

今回、日本心理学会に皆様に旅費の補助をしていただき、深く感謝いたします。上記のような収穫を得ることができましたのも、ひとえに会員の皆様のご助力によるものと自覚し、この成果を今後の研究に生かしてゆく所存です。大変ありがとうございました。

1　この報告書は帰国後２ヶ月以内に提出して下さい。

国際会議等参加旅費補助金報告書

2010年　7月　9日
（西暦で記入のこと）

日本心理学会理事長　殿

所属機関・職名　慶應義塾大学先導研究センター
人文グローバルCOE　非常勤研究員

氏　名　寺澤　悠理　㊞

下記のとおり国際会議参加旅費補助金の使用報告をいたします。

会議名称 ※正式名称および日本語訳	16th Annual Meeting of the Organization for Human Brain Mapping 第16回　ヒト脳機能マッピング学会
公式ホームページURL	http://www.humanbrainmapping.org/i4a/pages/index.cfm?pageID=3342
開催期間	2010年　6月　6日　～　2010　年　6月　10　日
旅行期間	2010年　6月　5日　～　2010　年　6月　12　日
開催場所 (国･都市･会場) ※現地名綴りおよび日本語表記	Spain, Barcelona, Palau de Congressos de Catalunya スペイン、バルセロナ、カタルーニャ会議場
発表者氏名 ※全員の名前と所属日本語表記	寺澤悠理[1,2], 福島宏器[2,3], 梅田聡[2] [1]慶應義塾大学先導研究センター、[2]慶應義塾大学文学部心理学研究室, [3]日本学術振興会
発表題目 ※正式名と日本語訳	How does interoceptive awareness interact with feeling emotion? : An fMRI study 内受容感覚は感情とどのように関連しているか？fMRIによる研究
補助金額	150000円（内訳　航空運賃(261,500円)の一部として　）

1　会議プログラムの発表者氏名・題目が記載されたページのコピーを添付して下さい。

2　申請書に記した事項とこの報告書で事項に相違のある場合（旅行期間や発表題目の変更など）は、その旨を該当事項欄に明記して下さい。

国際会議等参加報告書

貴会より国際会議等参加旅費補助を頂き、2010年6月6日から10日にスペイン、バルセロナにおいて開催された第16回　ヒト脳機能マッピング学会に参加し、発表を行った。この学会は、脳機能イメージング法を用いて脳活動と心的機能の関係や、その構造に関する研究を行っている研究者が一堂に会する大規模な学会である。学会は教育講演から始まり、5日間の会期中に、シンポジウム4件、小講演7件、および口頭発表とポスター発表セッションが行われた。シンポジウムのテーマは、近年認知神経科学の分野で関心を集め、急速に研究の蓄積が行われている分野に関するものであり、国際的な研究の動向を把握するために非常に有益であった。具体的には、脳皮質活動に基づく高次脳機能活動のデコーディング、中脳におけるドーパミン代謝と人間の行動傾向、視覚処理におけるトップダウンモジュレーション、といったテーマに基づく講演が行われた。また小講演では、精神疾患症例を対象にした脳機能画像研究や、記憶や意識、脳機能ネットワークに関する最先端の研究を行っている研究者自身による講演を聞くことができた。これらのテーマは、申請者自身の研究テーマとも深く関連したものであり、小講演への参加は知識の習得のみならず、自身の研究の展開を模索する上でも、重要な機会であった。

口頭発表・ポスター発表は約1600件ほど行われていた。脳機能画像研究の方法論に関するものから、精神・神経疾患症例を対象とした研究、感覚システム、言語・記憶・注意・推論・意思決定や情動に関する研究まで、そのテーマは実に多岐に渡っており、脳機能画像研究が多様な分野における有効な研究手段の一つになっていることを伺わせるものであった。申請者は情動のセッションにおいて、How does interoceptive awareness interact with feeling emotion? : An fMRI study（内受容感覚は感情とどのように関連しているか？）と題した研究発表を行った。この研究は、身体内部に関する感覚が、感情を主観的に経験するために不可欠な役割を担うのかという問いに対して実施されたものである。両者に共通あるいは特殊な脳活動の特定によって、感情を感じるための神経的・心的過程に関する検討を行った。発表では、国内外の研究者から関心を示して頂き、今後の展開において重要なアドバイスを数多く頂いた。特に、既に得たデータから、申請者の持っている問いに対してより論理的な検討と考察を行うための分析をいくつか提案して頂けたことは、本学会で発表できたことの最大の収穫であった。

このような貴重な機会を得るために、多大なご支援を頂いた貴会に心よりの感謝を申し上げ、上記の通りその成果をご報告させて頂く。

1　この報告書は帰国後２ヶ月以内に提出して下さい。

国際会議等参加旅費補助金報告書

2010　年　7　月　17　日
（西暦で記入のこと）

日本心理学会理事長　殿

所属機関・職名　九州大学人間環境学府心理学専攻博士後期課程

氏　名　宋永寧　㊞

下記のとおり国際会議参加旅費補助金の使用報告をいたします。

会議名称 ※正式名称および 日本語訳	27th International Congress of Applied Psychology 国際応用心理学会第27 回大会
公式ホームページ URL	http://www.icap2010.com/
開催期間	2010年　7月　11日　～　2010年　7月　16日
旅行期間	2010年　7月　9日　～　2010年　7月　16日
開催場所 (国・都市・会場) ※現地名綴りおよび 日本語表記	オーストラリア・メルボルン
発表者氏名 ※全員の名前と所属 日本語表記	宋　永寧　　箱田　裕司 九州大学人間環境学府
発表題目 ※正式名と日本語訳	The Precedence of Local over Global Information Processing in Attention Deficit Hyperactivity Disorder (ADHD) ADHDにおける部分情報への処理の優位性
補助金額	100,000円（内訳　航空運賃）

1　会議プログラムの発表者氏名・題目が記載されたページのコピーを添付して下さい。

2　申請書に記した事項とこの報告書で事項に相違のある場合(旅行期間や発表題目の変更など)は、その旨を該当事項欄に明記して下さい。

国際会議等参加報告書

【学会の様子】2010 年 7 月 11 日 ～ 2010 年 7 月 16 日にオーストラリア・メルボルン で開催された第 27 回国際応用心理学会大会に参加・発表を行った。学会参加者数は。今回の大会では、Symposia、Keynote Speaking, Brief Oral presentation, electronic presentation が 5000 件も超え、学会参加者数は 10000 以上であった。この参加者数から見ても明らかなように、世界中の臨床心理や神経科学の有名な研究者がこの学会に一堂に集まっており、大学院時代に読んだ論文の著者を間近に見ることも多く、多くの刺激を受けた。

【発表内容】

研究背景：干渉への制御機能を調べるために、大域情報と局所情報がお互いに矛盾する複合パタンもよく使われてきた。Navon(1977)は、部分文字の集合によって全体文字が構成される二階層の視覚刺激を考案し、これを複合パタン（Compound Pattern）と呼んだ。Navon(1977)が健常者を対象とし、その複合パタンを用いて、行った実験の結果では、大域情報への処理が速い、また、大域情報から局所情報への処理の干渉が強いという大域優位性が認められた。しかし、多くの研究では、病気を持つ患者（例えば、統合失調症 と自閉症）を対象とし、Navon 課題を行ったところ、局所優位性が認められた（Rawlings & Claridge, 1984; Goodarzi et al., 1988 ; Plaisted, Swettenham & Rees, 1999)。しかし、アメリカ精神疾患の診断・統計マニュアル(DSM-IV, APA, 1994）には ADD 児は詳細な情報（すなわち局所情報）への処理に困難を抱えると記述されている。従来の研究では、ADD 児における刺激の局所情報への処理と大域情報への処理の関係について、十分に検討されて来なかった。ADD 児における局所情報への処理不全の仮説を検証するために、Navon(1977)の複合パタンを用いて、実験を行った。

実験 1 ：注意分配及び注意シフト条件における Navon 課題

研究方法・結果：複合数字抹消検査（Compound Digit Cancellation Test: CDCT）（行場・大橋, 2009）を用いて、ADD 群と健常群に対して、大域及び局所間の干渉を調べたところ、注意障害者は小さな数字か大きな数字のどちらかに「3」か「6」が含まれていた場合に、反応が求められる（図 3 参照)。その結果、注意分配においては、大域情報への処理は健常者よりも、ADD 児の方が正答率が低いが、局所情報への処理は低くないことを明らかにした。注意シフトの条件におけては、直前の全体数字に続く部分数字（GL）と直前の部分数字に続く部分数字（LL）の場合よりも、直前の全体数字に続く全体数字（GG）と直前の部分数字に続く全体数字（LG）の場合の方が正答率が低いことが示された。それらの結果は ADD が大域情報を処理する際に、局所情報からの干渉を健常者以上に受けることを示唆する。

実験 2：注意シフト条件における Navon 課題

研究方法・結果：大域情報指向のみの課題(課題 1 と課題 2)、または局所情報指向のみの課題（課題 3 と課題 4）に、3」か「6」が含まれていた場合に、反応が求められたところ、ADD は局所情報からの干渉を健常者以上に受けるが、その逆の干渉は受けないことを明らかにした。

以上の**Navon**課題の結果から、注意条件に関わらず、ADD児における局所情報への処理の優位性が認められた。これらのことは複合パタンも無関連情報を抑制の働きを調べる有効な方法であることを示唆する。さらに、本研究が得られた結果はDSM-IVにあるADD児は局所情報への処理能力が弱いという記述を支持しなかった。先行研究によると、大脳の左半球を損傷すると、局所情報が分からなくなり、右半球を損傷すると、大域情報が分からなくなることが報告されている（Rovertson & Lamb, 1991)。また、ADHD児の右脳の機能の不全がADHDの原因の一つであると指摘されている（Castellanos et al., 1994)。従って、ADD児における大域情報処理の低下は右脳の機能の不全に起因すると推測される。

1　この報告書は帰国後２ヶ月以内に提出して下さい。

国際会議等参加旅費補助金報告書

2010　年　7　月　26　日
（西暦で記入のこと）

日本心理学会理事長　殿

所属機関・職名
大阪大学大学院人間科学研究科　博士前期課程
氏　　名　　紀ノ定　保礼　㊞

□
下記のとおり国際会議参加旅費補助金の使用報告をいたします。

会　議　名　称 ※正式名称および 日本語訳	27th International Congress of Applied Psychology 第 27 回国際応用心理学会
公式ホームページ URL	http://www.icap2010.com/
開　催　期　間	2010 年　7 月　11 日　～　2010 年　7 月　16 日
旅　行　期　間	2010 年　7 月　10 日　～　2010 年　7 月　17 日
開　催　場　所 (国･都市･会場) ※現地名綴りおよび 日本語表記	Australia・Melbourne・Melbourne Convention and Exhibition Center オーストラリア・メルボルン・メルボルン会議センター
発　表　者　氏　名 ※全員の名前と所属 日本語表記	紀ノ定保礼・臼井伸之介 （大阪大学大学院人間科学研究科）
発　表　題　目 ※正式名と日本語訳	Influence of Cognitive Bias on Young Cyclists' Road Crossing Intentions at Non-signalized Intersections 認知バイアスが若年サイクリストの無信号交差点横断意図に及ぼす影響
申　請　金　額	189,615 円　（航空運賃 112,800 円、宿泊費 38,565 円、大会参加費 38,250 円） （実際の補助金額：100,000 円、航空運賃 134,900 円の一部として）

1　会議プログラムの発表者氏名・題目が記載されたページのコピーを添付して下さい。

2　申請書に記した事項とこの報告書で事項に相違のある場合（旅行期間や発表題目の変更など）は、その旨を該当事項欄に明記して下さい。

国際会議等参加報告書

申請者は，2010 年 7 月 11～16 日においてオーストラリアのメルボルンで開催された 27th International Congress of Applied Psychology (以下，ICAP 2010)に参加し，Electronic Poster 発表を行うとともに，最新の交通心理学研究に関する意見交換と情報収集を行った。

交通心理学に関わる研究では，ドライバーの意識や行動に焦点を当てた研究が多い。今回の ICAP2010 でも，申請者の専門である自転車利用者など他の交通参加者に関する研究発表は非常に少なかった。ただし，申請者が以前に自転車利用者に対して行った研究手法をドライバーに対して適用した研究が数件あり，発表の聴講を通じて客観的に申請者の研究の限界点と今後の展望を知ることが出来た。また，発表の中にはドライバー以外の交通参加者に対しても応用可能な手法を採用している研究もあり，今後の研究にとって非常に有用な示唆を得ることが出来た。

申請者が今回の学会参加で最も勉強になったと感じたのは，研究自体よりも発表後の質疑応答であった。ディスカッションのレベルが非常に高く，知識量・論理性ともに自らの未熟さを痛感した。また，質疑に参加したくとも，質問内容を英語に変換している間に次の発表に移行してしまうこともあった。申請者はこれまでにも国際学会に数回参加し，海外の研究者とのディスカッション経験もあるが，まだまだ英語力にも精進の必要性を感じた。ただし，議論に参加できる要件には，英語力以外にも積極性も含まれるといえる。ICAP2010 は参加者が 3000 人を超える大きな大会であり，世界各国から研究者が集まっていた。海外からの参加者の中にも英語が苦手な研究者がいたように思えるが，疑問に思った点があれば迷い無く挙手して議論を交わす姿は印象的であった。

一方で，発表会場外や食事会などのインフォーマルな場では，インタラクティブに意見を交わし，納得のいくまで話し合うことも出来た。口頭発表のように時間が限られた中でも即応的に英語で議論に加われるようになることが，今後の課題であるといえる。

申請者自身の発表に関しては，Electronic Poster という形式を採ったため，どれほどの研究者に申請者の研究を知ってもらったかは不明であった。ただし，偶然にも会場で音楽心理学を専門とするイギリスの研究者と知り合い，直接的にディスカッションを交わすことが出来た。日本では他分野の研究者と意見を交わすこと自体が少なく，国際学会の場でそのような機会に恵まれたことは幸運であった。また，申請者と同じく交通心理学を専攻する韓国の大学院生とも知り合え，簡潔にではあったが互いの研究に関して討議することが出来た。交通心理学領域では国によって交通状況や文化的背景が異なるという事情があるため，研究内容に関して国際比較を行うことは非常に意義が大きかったといえる。

上記の通り，今回の海外出張は非常に収穫の多い学会参加となった。今後も勉強の場を国内に限定せず，積極的に国際学会へ参加したいと考えている。このような機会を与えてくださった貴学会に心より御礼申し上げます。

1　この報告書は帰国後２ヶ月以内に提出して下さい。

国際会議等参加旅費補助金報告書

2010年　　8月　　18日
（西暦で記入のこと）

日本心理学会理事長　殿

所属機関・職名　長崎大学心の教育総合支援センター
助教

氏　　名　　田中 勝則

下記のとおり国際会議参加旅費補助金の使用報告をいたします。

会議名称 ※正式名称および日本語訳	11th International Congress of Behavioral Medicine (ICBM 2010) 第11回国際行動医学会議
公式ホームページURL	http://www.icbm2010.org/
開催期間	2010年　8月　4日　～　2010年　8月　7日
旅行期間	2010年　8月　3日　～　2010年　8月　8日
開催場所 (国・都市・会場) ※現地名綴りおよび日本語表記	USA, Washington DC, Grand Hyatt Washington アメリカ合衆国，ワシントンDC，グランドハイアットワシントン
発表者氏名 ※全員の名前と所属日本語表記	田中 勝則（長崎大学心の教育総合支援センター） 田山 淳（長崎大学保健・医療推進センター） 有村 達之（九州大学大学院医学研究院） 管原 正志（長崎大学教育学部）
発表題目 ※正式名と日本語訳	Preliminary development of the Japanese Version of Body Image Concern Inventory（日本語版ボディイメージ懸念目録作成の試み） ＊修正　申請時は”Concerns”と記していたが、実際の原版では”Concern”での標記が正しいため、本報告書にて発表題目の訂正を行っている。
補助金額	150,000円（内訳　往復の航空運賃の一部として）

1　会議プログラムの発表者氏名・題目が記載されたページのコピーを添付して下さい。

2　申請書に記した事項とこの報告書で事項に相違のある場合(旅行期間や発表題目の変更など)は、その旨を該当事項欄に明記して下さい。

国際会議等参加報告書

2010年8月4日よりWashington DCにて開催された第11回国際行動医学会議(11th International Congress of Behavioral Medicine)において、この度"Preliminary development of the Japanese Version of Body Image Concern Inventory"という演題にてポスター発表する機会を得た。報告者にとってはこれが初めての国際学会での発表であり、期待と緊張の中での渡航となった。

＜発表内容＞

従来、我が国で醜形恐怖と呼ばれていた現象について、"自己の容姿における想像上の欠陥への没頭，もしくは些細な身体上の欠点に対してその個人が著しい懸念を抱いている状態とされ，結果として日常場面における回避的行動や確認行動が増加すること，およびこれに伴う社会機能不全が生じること"と再定義を行い、これを「身体醜形懸念」として測定する自記式質問紙 Body Image Concern Inventory (Littleton et al., 2005)の日本語版を作成し、その因子構造、信頼性、妥当性について検討を行った。

その結果、日本語版では原版とは異なる3因子構造が得られたものの、その因子構造は極めて明瞭なものであった。この因子構造を用い、身体醜形懸念の男女差を比較したところ、女性において身体醜形懸念が有意に高い傾向にあることが示された。信頼性については内的一貫性および再検査信頼性に関して検討がなされ、日本語版は十分な信頼性を有していることが示された。また、妥当性についても、併存的妥当性と収束妥当性の観点から検討がなされ、日本語版が十分な妥当性を持つことが示された。今後の課題として、臨床群を対象とした調査を進めカットオフ値の設定を行う等、自記式質問紙としての更なる洗練の必要性が示唆された。

発表内容に対しては、欧米の研究者のみならず中東やアジア等、様々な文化的背景を有する研究者から質問を得た。結果に及ぼす文化的影響や質問紙の作成過程等についての質疑を交わした。また、身体醜形懸念に関連する心理学的要因についても議論を行った。既に終了している報告者の他の研究についても意見を交わし、今後に向けて参考となる知見を得ることができた。

その他、学会では行動医学領域の最新知見に関するセッション等が開かれており、これらにも参加した。また、学会の今後をめぐってのオープンセッションにも参加した。その場の参加者は決して多くはなかったものの、国際的な視野で学会を如何に発展させていくかという話題に触れる機会は普段そうそうあるものではなく、新鮮なものであった。

「初めての国際学会での発表」ということでかなり身構えていたところもあったが、参加してみるとそれが気後れにしか過ぎないことを実感できた。研究のみならず語学やプレゼンテーション技術の向上等の課題は数多く残されているが、そうした課題は今後、経験を積み重ねることで少しずつ改善されていくものと願いたい。報告者にとって、更なる機会を得るための動機づけを高める上でも、今回の国際学会への参加は非常に有用な機会であった。もし、国際学会への参加に躊躇をしている方がいらっしゃれば、こうした助成制度等を活かして、ぜひ、その一歩を踏み出してほしいと思う。

今回、このような貴重な機会を与えてくださった日本心理学会に深く感謝致します。

1　この報告書は帰国後２ヶ月以内に提出して下さい。

国際会議等参加旅費補助金報告書

2010年　8　月　4　日
（西暦で記入のこと）

日本心理学会理事長　殿

所属機関・職名　神戸大学大学院海事科学研究科・研究機関研究員

氏　名　中井　宏

下記のとおり国際会議参加旅費補助金の使用報告をいたします。

会議名称 ※正式名称および日本語訳	27th International Congress of Applied Psychology 第27回国際応用心理学会
公式ホームページURL	http://www.icap2010.com/
開催期間	2010　年 7　月 11　日　～　2010　年 7　月 16　日
旅行期間	2010　年 7　月 10　日　～　2010　年 7　月 18　日
開催場所 (国・都市・会場) ※現地名綴りおよび日本語表記	Australia, Melbourne, Melbourne Convention and Exhibition Centre オーストラリア・メルボルン・メルボルン会議展示センター
発表者氏名 ※全員の名前と所属日本語表記	中井　宏[1,2]・臼井　伸之介[2] [1]神戸大学大学院海事科学研究科附属国際海事研究センター [2]大阪大学大学院人間科学研究科
発表題目 ※正式名と日本語訳	A comparison between the self-assessed and instructor-assessed driving skills of a sample of Japanese driving school students 日本の自動車教習所教習生の運転技能に対する自己評価と指導員評価の比較
補助金額	100,000円（内訳　大会参加費、交通費、宿泊費）

1　会議プログラムの発表者氏名・題目が記載されたページのコピーを添付して下さい。

2　申請書に記した事項とこの報告書で事項に相違のある場合(旅行期間や発表題目の変更など)は、その旨を該当事項欄に明記して下さい。

国際会議等参加報告書

今回の国際会議では、大会3日目（7月13日）の午前8時半から10時までの「Age related driving behaviour」というセッションにおいて、“A comparison between the self-assessed and instructor-assessed driving skills of a sample of Japanese driving school students”の題目で口頭発表を行った。発表に対して、聴衆からの質問が3点ほどあり、発表内容を今後誌上投稿するに向けて、非常に有意義な意見を伺うことができた。

またこの学会では、私が専門とする交通心理学領域のセッションがほぼ常に開催されており、海外で現在実施されている最新の研究の動向を知る機会となった。加えて、自動車交通に関する研究を実施する場合、免許制度や道路システムなどが国によって大きく異なることもあり、ヨーロッパやオセアニアの研究者と幅広く知識を交換することができた。次回以降のこのような国際会議では、今回知り合った諸外国の若手研究者と共にシンポジウム等を企画することも視野に入れていきたい。

最後に、諸外国の研究者の発表を聞き、内容としては引けをとらないと感じたものの、英語でのプレゼンテーション能力に大きな壁を痛感した。この点に関しては、今後の課題としたい。

1　この報告書は帰国後2ヶ月以内に提出して下さい。

国際会議等参加旅費補助金報告書

2010年　8月　3日
（西暦で記入のこと）

日本心理学会理事長　殿

所属機関・職名筑波大学大学院　3年生博士課程
人間総合科学研究科　心理学専攻　1年次

氏　　名　　村上　達也

下記のとおり国際会議参加旅費補助金の使用報告をいたします。

会議名称 ※正式名称および日本語訳	27th International Congress of Applied Psychology (ICAP2010) 第27回国際応用心理学会議
公式ホームページURL	http://www.icap2010.com/
開催期間	2010年　7月　11日　～　2010年　7月　16日
旅行期間	2010年　7月　10日　～　2010年　7月　17日
開催場所 (国･都市･会場) ※現地名綴りおよび日本語表記	Melbourne Convention and Exhibition Centre, Melbourne, Australia. （オーストラリア・メルボルン・メルボルン国際会議展示場）
発表者氏名 ※全員の名前と所属日本語表記	村上　達也（筑波大学大学院人間総合科学研究科） 櫻井　茂男（筑波大学）
発表題目 ※正式名と日本語訳	The Structure of Attachment Mental Model in Middle Childhood 児童期におけるアタッチメントの心的表象の構造
補助金額	100,000円（内訳　航空運賃　175,000円 ）

1　会議プログラムの発表者氏名・題目が記載されたページのコピーを添付して下さい。

2　申請書に記した事項とこの報告書で事項に相違のある場合(旅行期間や発表題目の変更など)は、その旨を該当事項欄に明記して下さい。

国際会議等参加報告書

このたびは、日本心理学会より、「国際会議等参加旅費補助金」を得て、オーストラリア連邦メルボルンで開催された第27回国際応用心理学会に参加する機会を得たことを、感謝申し上げます。大学院生である申請者にとって、このような経済的な支援がなければ、国際学会に赴き、発表することは、到底叶いませんでした。以下、補助金の使用状況、発表・参加の状況について、報告させていただきます。

1 補助金の使用状況に関する報告

補助を受けた100,000円は、成田⇔シドニー経由⇔メルボルンの往復の航空券運賃として全額使用した。航空券運賃は燃料税込みで、175,000円であった（領収書添付）。

2 発表・参加の状況に関する報告

(1)発表の状況

発表は2010年7月15日午後（14:00~15:30）のBrief Oral Presentation Programにおいて行われた。申請者は、"The structure of attachment mental model in middle childhood"というタイトルで、口頭による発表を行った。Sectionは、IAAP Division 6 Clinical & Community Psychology & IAAP Division 8 Heath Psychology: Childhood Disordersであった。今回の発表内容は、児童の特定他者に対するアタッチメントの内的作業モデルが、どのように組織化されているかについて検討を行うというものであった。

Brief Oral Presentation ProgramはBooth内で行われ、25席程度の座席が用意されていた。発表時には満席となっていた。フロアとの質疑応答に関しては、オーストラリアやロシアの心理学者から質問が相次いだ。特に、個人にとってのアタッチメント対象を特定した上で、アタッチメントの内的作業モデルを測定した点について、興味を惹いたものと考えられる。

(2)参加の状況

研究発表に関しては、若手の研究者が多く発表を行うBrief Oral Presentationを中心に聴講した。また、基礎研究を臨床応用に発展させたいくつかのシンポジウムに参加した。

特にFrostの完全主義に関する講演やKyriosのOCDに関する講演を聴講して、基礎研究を臨床応用に繋げるまでの一連の研究が大変参考になった。1つの研究だけから、すぐに臨床応用が行われるのではなく、追試が行われ、いくつもの媒介変数を検討し、臨床群と非臨床群との比較を行った上で、臨床応用が行われるという一連のプロセスは、基礎研究に従事するものとして、非常に興味深いものであった。

一方、海外の若手研究者には、縦断研究を行った個人内変動に着目した調査研究が非常に多かった。日本でも縦断研究に注目が集まっているが、それ以上に海外では、個人内変動に関しての関心が高いように感じた。また、最終従属変数として行動を測定する研究者が多く、実際の行動に心理的変数がどのような影響を及ぼすのか、に関しての検討が多く見受けられた。

また、海外の研究者は口頭発表に非常に積極的で、同じ発表者が何度も発表している姿が印象的であった。一方、日本人の口頭発表者は少なく、日本の研究者はより積極的に、研究知見を発信していく必要を感じた。

1　この報告書は帰国後2ヶ月以内に提出して下さい。

国際会議等参加旅費補助金報告書

2010 年　　10 月　　18 日
（西暦で記入のこと）

日本心理学会理事長　殿

所属機関・職名　広島大学大学院総合科学研究科・院生

氏　　名　　森　数馬

下記のとおり国際会議参加旅費補助金の使用報告をいたします。

会　議　名　称 ※正式名称および 日本語訳	The 11th International Conference on Music Perception and Cognition
公式ホームページ URL	http://depts.washington.edu/icmpc11/index.html
開　催　期　間	2010 年　8 月　23 日　～　2010 年　8 月　27 日
旅　行　期　間	2010 年　8 月　22 日　～　2010 年　8 月　29 日
開　催　場　所 (国･都市･会場) ※現地名綴りおよび 日本語表記	USA・Seattle・The University of Washington School of Music アメリカ合衆国・シアトル・ワシントン大学音楽学部
発　表　者　氏　名 ※全員の名前と所属 日本語表記	森数馬・岩永誠 広島大学大学院総合科学研究科
発　表　題　目 ※正式名と日本語訳	The influence of the lyric contents on the emotional contagion of music 演奏音の感情伝染に及ぼす歌詞内容の影響について （申請書とは発表題目が変更しています）
補　助　金　額	100,000 円

1　会議プログラムの発表者氏名・題目が記載されたページのコピーを添付して下さい。

2　申請書に記した事項とこの報告書で事項に相違のある場合（旅行期間や発表題目の変更など）は、その旨を該当事項欄に明記して下さい。

国際会議等参加報告書

2010年8月23日から8月27日まで，5日間に渡ってアメリカ・シアトルで開催されたICMPC11(第11回国際音楽知覚認知学会)に参加してきました。広島から韓国を経由してシアトルまで長時間のフライトでしたが，開催地付近はバスや電車などの公共交通機関が発達していたため，スムーズに移動できました。

領域としては，音楽の人間科学に関わる基礎から臨床まで幅広く，朝8時から夜7時ごろまで様々なプログラムが企画されていました。約300の研究発表があり，会議はワシントン大学にて5，6個の部屋を使用して行われました。口頭発表の行われる部屋は近接していたため，常に全体を把握し自分の見たい発表を行き来することができました。不満に感じたのは，ポスター発表の時間が短かったことです。そのため，興味のあるポスターを見る時間が確保できないことが多々ありました。

プログラムは，ワークショップ・シンポジウム・講演・ポスター発表など多彩で，国際学会ならではの，普段国内では会えない有名研究者が参加されていました。私の専門とする音楽と感情に関する領域でも，近いことをやっている人の発表が多々あり，最新の研究動向に触れることができました。また，私は，「The influence of the lyric contents on the emotional contagion of music（演奏音の感情伝染に及ぼす歌詞内容の影響について)」というタイトルでポスター発表を行いましたが，海外の音楽と感情研究を行っている方々に発表を見に来ていただき非常に有意義な経験をすることができました。国内では，このテーマの心理学的な研究はメジャーとは言えないので，国際学会ならではの経験であったと思います。数人の研究者とは密な議論をすることもでき，今後の研究に有益なアドバイスをいくつかもらうことができました。

最後に，このような貴重な経験をする手助けをしてくださった日本心理学会に感謝を申し上げたいと思います。

1　この報告書は帰国後2ヶ月以内に提出して下さい。

国際会議等参加旅費補助金報告書

2010年　8月　9日
（西暦で記入のこと）

日本心理学会理事長　殿

所属機関・職名
筑波大学大学院人間総合科学研究科・大学院生
氏　　名　　荒井　崇史

下記のとおり国際会議参加旅費補助金の使用報告をいたします。

会議名称 ※正式名称および日本語訳	27th International Congress of Applied Psychology 第27回応用心理学会国際会議
公式ホームページURL	http://www.icap2010.com/
開催期間	2010年 7月 11日　～　2010年 7月 16日
旅行期間	2010年 7月 11日　～　2010年 7月 18日
開催場所 (国･都市･会場) ※現地名綴りおよび日本語表記	Australia, Melbourne, Melbourne Convention and Exhibition Centre オーストラリア，メルボルン，メルボルン・コンベンション・アンド・エクスヒビション・センター
発表者氏名 ※全員の名前と所属日本語表記	荒井崇史・吉田富二雄（筑波大学大学院人間総合科学研究科）
発表題目 ※正式名と日本語訳	The Effects of personal interaction on seeking information about crime prevention measures 他者との会話が防犯対策に関する情報探索に及ぼす影響
補助金額	100,000円（内訳　　往復航空券代の一部　　）

1　会議プログラムの発表者氏名・題目が記載されたページのコピーを添付して下さい。

2　申請書に記した事項とこの報告書で事項に相違のある場合（旅行期間や発表題目の変更など）は、その旨を該当事項欄に明記して下さい。

国際会議等参加報告書

2010年7月11日~2010年7月16日，オーストラリア（メルボルン）のMelbourne Convention and Exhibition Centreで開催された，27th International Congress of Applied Psychology（第27回応用心理学会国際会議）に参加した。以下に，参加状況等を報告する。

1．補助金の使用状況

補助を受けた100,000円は，日本（東京成田）⇔オーストラリア（行き：ブリスベン→メルボルン／帰り：メルボルン→ケアンズ）の往復航空運賃として全額を使用した。なお，航空運賃は（燃料費，空港使用税等込），165,260円であった。

2．発表・参加の状況に関する報告

(1) Electronic Poster Presentationによる発表

本国際会議では，Electronic Poster Presentationによる発表を行った。初めてのシステムで若干の不安はあったものの，空き時間を見つけて研究を閲覧でき，その点では優れたシステムであると感じた。ただし，紙媒体による発表とは異なり，その場での議論がしにくい点で困難さを感じた。ポスターの閲覧状況に関する統計情報を見ると，10回以上の閲覧回数であり，この数字が多いのか少ないのかは別として，複数の研究者に発表研究を参考にしてもらえたことは嬉しく思う。また発表内容に関して，海外の研究者から連絡をいただき議論を行えた。その後も，メールでのやり取りを行っており，今後，一層議論を深めたいと考えている。なお，発表内容の要約を以下に掲載する（アブストラクト，発表スライドについては別紙に添付する）。

This study attempted to identify the effects of personal interaction with others on a person's willingness to prevent crime and on an incentive to seek information about crime prevention measures. In a web-based survey conducted in Japan, mothers (N = 1040) with 3-12 years old children were asked to complete a questionnaire that measured the amount of personal interactions with others in their neighborhoods, her willingness to prevent crime, and the frequency of seeking information about crime prevention measures on the Internet. Structural equation modeling gave the following results. (1) Overall, a wide social network increased the frequency of conversations about children's safety with neighbors, and such conversations encouraged mothers to seek information about crime prevention by making them realize their own responsibility in crime prevention and increasing their willingness to cooperate with neighbors. (2) However, for some mothers, such conversations increased their willingness to defer crime problems to the police and government, and that decreased their incentive to seek information about crime prevention. (3) When a wide social network increased the frequency of conversations about news contents, such conversations indirectly decreased information-seeking through a willingness to defer crime problem solving to the police and government.

(2) 参加状況

Electronic Poster Presentationの閲覧だけでなく，幾つかの口頭発表，シンポジュウムにも参加した。まず，Electronic Poster Presentationについては，日本人研究者による犯罪研究はいくつか見られたが，海外研究者による犯罪研究が少数であったように感じた。しかし，関連する研究は多数見られ，その点では有意義な国際会議であったと言える。一方で，口頭発表やシンポジュウムにおいては，性犯罪者のリスク管理に関する発表等，興味深い発表を目にすることができた。ただ，リスク研究の第一人者であるPaul Slovic教授のOpening Keynoteに参加できず，その点では極めて残念であった。本国際会議を通して，犯罪に関して心理学的な研究を積極的に行っている欧米の研究に触れることができたことは大変勉強になった半面，日本にでもそれに負けず，より積極的な取り組みが必要であるように感じた。また，犯罪加害者に関する心理学研究はだけでなく，日本においても市民と犯罪，あるいは防犯対策という意味での犯罪心理学が必要であると感じた。

最後に，このたびは，日本心理学会より「国際会議等参加旅費補助」を得て，27th International Congress of Applied Psychologyに参加し，国外の研究者と議論を行う機会を得ることができました。この場をお借りして，心より感謝申し上げます。

1　この報告書は帰国後２ヶ月以内に提出して下さい。

国際会議等参加旅費補助金報告書

2010年　9月　15日
（西暦で記入のこと）

日本心理学会理事長　殿

所属機関・職名　甲子園大学大学院人間文化学研究科
大学院生

氏　　名　　景村　幸弘　㊞

下記のとおり国際会議参加旅費補助金の使用報告をいたします。

会議名称 ※正式名称および日本語訳	The 27th International Congress of Applied Psychology (ICAP2010) 第27回国際応用心理学会議
公式ホームページURL	http://www.icap2010.com/
開催期間	2010年　7月　11日　～　2010年　7月　16日
旅行期間	2010年　7月　10日　～　2010年　7月　17日
開催場所 (国･都市･会場) ※現地名綴りおよび日本語表記	Melbourne Convention and Exhibition Centre （オーストラリア・メルボルン・メルボルン会議展示センター）
発表者氏名 ※全員の名前と所属日本語表記	景村幸弘（甲子園大学大学院人間文化学研究科） 原田　章（追手門学院大学 経営学部）
発表題目 ※正式名と日本語訳	Effects of self-evaluation of computer proficiency on computer self-efficacy in general information education （情報教育におけるコンピュータに対する習熟度自己評価がコンピュータに対する自己効力感に与える影響）
補助金額	100,000円（内訳　国内外旅費の一部　　）

1　会議プログラムの発表者氏名・題目が記載されたページのコピーを添付して下さい。

2　申請書に記した事項とこの報告書で事項に相違のある場合（旅行期間や発表題目の変更など）は、その旨を該当事項欄に明記して下さい。

国際会議等参加報告書

The 27th International Congress of Applied Psychology(第27回国際応用心理学会議)は，2010年7月11日から16日にかけて,オーストラリアのメルボルンにある Melbourne Convention and Exhibition Centreにて開催された。日本では，大変暑い時期であったが，オーストラリアの気候は 冬で，20°Cを下回る日がほとんどであった。快適な気候であった。6日間の会期の間には，数多くのシンポジウム,講演,口頭発表ポスター発表が行われていた。

今回の国際応用心理学議は，3000名を超える研究者が参加しており,このような大規模な国際学会に参加するのは2回目で，発表するのは初めてであった。

日本からの参加者が大変多く参加していたそうである。今回，電子ポスターで発表された日本の研究者が多く見受けられた。口頭発表では，日本の研究者が発表を行い,各国の研究者と議論をしている場面を数多くみかけた。日本の研究者が国際的な場で活躍しているということを感じることができた。

また,これまで国際学会は，The XXIX International Congress of Psychology ICP 2008(国際心理学会 2008)の学会に参加しただけであった。2つの学会から，心理学の様々な領域の最新の研究に触れることができ有意義であった。

発表について,今回は「Effects of self-evaluation of computer proficiency on computer self-efficacy in general information education(情報教育におけるコンピュータに対する習熟度自己評価がコンピュータに対する自己効力感に与える影響)」というタイトルで口頭発表を行った。発表した研究の概要は以下に示す。

研究の目的は，コンピュータに対する習熟度別でコンピュータに対する自己効力感の変化を習熟度別・年度別で比較した。調査対象者は，1回生212名であった。調査時期は，4月(受講前)，6月(中間)，8月(期末)の計3回であった。

主要な結果は，以下の通りであった。(1) 受講前の高群の得点が先行研究の得点よりも高かった。(2) 受講前から中間にかけて，先行研究と異なり，高群は低下していた。(3) 中間から期末にかけて，高群は増加した。これらの結果から，高群の学生の中に，仮想的有能感を持つ学生が存在する可能性が示唆された。

仮想的有能感に対する研究であるという点,質問紙法を用いて縦断的調査を行っていた点が，質問していただいた研究者にとって興味深かったようである。しかし，英語力には自信がないとはいえ、いざとなったら発表原稿を暗記すれはよいだろうという甘い考えで望んでいたため、実際には質疑応答はうまくいかず，散々なものであった。振り返ると質問自体は，理解できる容易な内容であったが，緊張していたためすぐに質問を理解できなかった。今回の発表を通して，研究の内容を伝えるだけではなく、相手と議論を深めるためには、最低でも日常会話をこなせる程度の英語力が必要であることを改めて痛感させられた。また，積極的に国際学会に参加し，英語でのコミュニケーションの機会を逃さないために英語力の向上，研究内容の向上をはかっていきたい。

最後に,この学会への参加に助成していただいた日本心理学会,学会関係者の方々に厚く御礼申し上げます。

1　この報告書は帰国後２ヶ月以内に提出して下さい。

国際会議等参加旅費補助金報告書

２０１０年　　９月　　１日
（西暦で記入のこと）

日本心理学会理事長　殿

所属機関・職名　日本大学文理学部人文科学研究所　研究員

氏　　名　　勝谷　紀子　㊞

下記のとおり国際会議参加旅費補助金の使用報告をいたします。

会　議　名　称 ※正式名称および 日本語訳	The 27th International Congress of Applied Psychology 第 27 回国際応用心理学会
公式ホームページ URL	http://www.icap2010.com/
開　催　期　間	2010 年 7 月 11 日～　　2010 年 7 月 16 日
旅　行　期　間	2010 年 7 月 10 日～　　2010 年 7 月 18 日 ※申請書に記した期間よりも 1 日後に日本に到着いたしました。
開　催　場　所 (国･都市･会場) ※現地名綴りおよび 日本語表記	The Melbourne Convention and Exhibition Centre, Melbourne , Australia メルボルン会議展示場、メルボルン、オーストラリア
発　表　者　氏　名 ※全員の名前と所属 日本語表記	勝谷紀子（日本大学文理学部）・岡隆（日本大学文理学部）・坂本真士（日本大学文理学部）・朝川明男（日本大学大学院）・山本真菜（日本大学大学院）
発　表　題　目 ※正式名と日本語訳	Lay theories of depression in Japan: Analysis on answer data of a knowledge sharing community site 日本におけるうつのしろうと理論：知識共有コミュニティサイトにおける回答データの分析
補　助　金　額	100,000 円（内訳　すべて航空券の費用に使用しました ）

1　会議プログラムの発表者氏名・題目が記載されたページのコピーを添付して下さい。

2　申請書に記した事項とこの報告書で事項に相違のある場合(旅行期間や発表題目の変更など)は、その旨を該当事項欄に明記して下さい。

国際会議等参加報告書

オーストラリアのメルボルンで開催された第27回国際応用心理学会（ICAP）において、e-poster形式による研究発表を行ないました。以下のとおり参加・発表をいたしましたので、ご報告いたします。

この学会は、国際応用心理学会ということで、研究領域が非常に幅広く、発達、認知、教育、産業、社会、言語、臨床などさまざまであった。そのため、多くの研究者が研究を発表しやすい学会ではないかと思われた。

滞在先のホテルでも、学会会場となるコンベンションセンターでも、さまざまな人種の人がはたらいていた。学会会場でのスタッフには学生ボランティアらしき方も多くみられた。スタッフの方々は親切に対応してくれて、英会話で多少つまっても、いやな顔をされることもなく、自分だけ黄色人種という肩身の狭い感じもなく、非常に快適に過ごしていた。

学会会場では、毎日、「今日のみどころ」のような両面カラー刷り１枚のチラシをスタッフが配ってくれる。学会が始まる前からもメールでの連絡もかなり頻繁にきたし、参加者への対応が相当に細やかで、まめであると感じた。

会場では、さまざまな時間帯に食べ物や飲み物が多く提供された。モーニングティー（コーヒーやお茶などの飲み物、クッキーや果物）、日替わりの昼食（登録の際受付でもらったチケットを出してから自分で自由にとる。豆や野菜のサラダ、カレー、肉や野菜がのった太めの麺、パスタ、とうもろこしのようなものの山盛りにつくねのような肉が添えられたもの、ジュース、果物かケーキ）、アフタヌーンティー（コーヒーやお茶などの飲み物、クッキーと果物）、という具合であった。

個人の研究発表については、いろいろな発表形式が用意されていた。申請者が発表を行ったe-posterの他にも、通常の口頭発表、ブリーフオーラルとよばれる形式が設定されていた。ブリーフオーラルセッションは、ホールのような広い部屋に小さなブースが８つほどあり、各ブースで一人10分程度で研究発表を行うというものだった。ブースは狭く、黒い板でできていて、まるで演劇小屋のようであった。このセッションでは、各ブースで数名が口頭発表をするのだが、進行の仕方がそれほど厳密ではなく、発表者全員が最後まで残って議論を熱心に続けているブースもあり、別のブースでは話し終わったら発表者がすぐブースを出ていく場面もみられた。

申請者は、"Lay theories of depression in Japan: Analysis on answer data of a knowledge sharing community site"という研究をe-poster形式で発表した。e-posterでは、PowerPointで作成したポスターのファイルをアップロードすればすべての作業が完了であった。質疑応答の時間も特に設けられていなかった。会場では、専用端末でポスターのファイルを閲覧するだけでなく、コメント機能で発表者にメッセージを送ることもでき、メッセージは本人のメールアドレスに届くようになっている。申請者にもメッセージがいくつか届いていた。 大会プログラムのe-poster発表者リストを見ると、日本人の名前を非常に多く見つけた。しかしながら、（気のせいかもしれないが）プログラムで見かける名前の多さにくらべると、会場で日本人の姿を見かけることは少ないように感じられた。e-posterであるので対面で対話をする機会が少なくなってしまい、残念であった。

会場では、インターネットに接続された端末を無料で使えるコーナーが設置されていたが、日本語が自由に使えないのが困ったことであった。エンコードがうまくいかずに日本語が化けたり、日本語入力システムがそもそも入っていなかったりした。メールを書くときなどはホテルに戻るなどを余儀なくされた。

学会に参加した感想として、e-posterの他に紙のポスターセッションもやはり欲しいと感じた。ポスターのファイルを事前にアップするだけなので、英語で発表をすることへの抵抗感が少ないのはいいが、他の国や地域の研究者とコミュニケーションをとる機会が極度に少なくなってしまった。自分の研究発表をしたという感じが少し乏しかったのが残念ながら正直なところである。

次回のICAPは２０１４年にパリで開催予定であり、The International Congress of Psychology(ICP)は２０１２年にケープタウンで開催される予定とのことであった。閉会式では、ICPの大会関係者がサッカーのワールドカップで使用されたブブセラを吹いて宣伝をしていた。次回もICAPに参加することになったら、e-poster以外の発表形式に挑戦して、海外の研究者とより交流を深めたいと思う。

1　この報告書は帰国後２ヶ月以内に提出して下さい。

国際会議等参加旅費補助金報告書

2010年　9月　13日
（西暦で記入のこと）

日本心理学会理事長　殿

所属機関・職名 久留米大学比較文化研究所・研究員

氏　　名　　金　　浓 淵　　㊞

下記のとおり国際会議参加旅費補助金の使用報告をいたします。

会　議　名　称 ※正式名称および 日本語訳	2010 韓国心理学会 International Conference 及び学術大会
公式ホームページ URL	http://www.koreanpsychology.or.kr/symposium/info.asp
開　催　期　間	2010年　8月　19日　～　2010年　8月　21日
旅　行　期　間	2010年　8月　18日　～　2010年　8月　25日 (申請書では旅行期間を 21 日までとしていたが、韓国先生方と研究の打ち合わせのために、滞在期間を延長し、25 日日本着の飛行機とした)
開　催　場　所 (国･都市･会場) ※現地名綴りおよび 日本語表記	韓国・ソウル・B-83 マルチメディア講義ビル
発　表　者　氏　名 ※全員の名前と所属 日本語表記	金　浓淵[1]　津田　彰[1]　堀内　聡[1]　朴　榮信[2]　金　義哲[2]　洪　光植[3] [1]Kurume Univ. [2]Inha Univ. [3]Jeonju national Univ. of education
発　表　題　目 ※正式名と日本語訳	Expert system analysis of stress management intervention based on Transtheoretical model: With specific focus on Japanese college students 多理論統合モデル(TTM)に基づくエキスパート・システムによる 日本人大学生におけるストレスマネジメント介入の効果研究
補　助　金　額	5万円（内訳　福岡空港からソウルまでの旅費代金）

1　会議プログラムの発表者氏名・題目が記載されたページのコピーを添付して下さい。

2　申請書に記した事項とこの報告書で事項に相違のある場合(旅行期間や発表題目の変更など)は、その旨を該当事項欄に明記して下さい。

国際会議等参加報告書

日本心理学会の国際会議等参加旅費補助金を受けることで、2010年8月19日から21日までソウル大学で開催された韓国心理学会に参加することができた。 当学会では、2009年に日韓両心理学会の交流協定書の調印がなされ、学術の交流と協力を推進することとし，交流活動を進めることになっている。韓国人として、日本で留学している立場により、日本や韓国の心理学会が学術の交流と協力を推進することにより両国で活動できることを嬉しく思っている。今回、少しでも日韓の学術交流に貢献できることを願いながら参加した。

2010年韓国心理学会は、8月19日では国際シンポジウムが開催され「幸福な社会への心理学」をテーマとして米国・日本・中国など、学者を呼び、発表と議論が行われた。20日は、ポスター発表や韓国の学者を中心としたシンポジウムが開催され、有意義な時間であった。21日は、口頭発表と分科別のシンポジウムが開催された。

私は、21日に口頭発表をした。テーマは、日本人大学生を対象とした多理論統合モデルに基づくエキスパート・システムによる介入を行う、ストレスマネジメント行動変容に及ぼす効果研究であった。この研究は、日本では初めての研究であり、韓国でも初めて紹介される研究であった。今後、日本と韓国でストレスマネジメントの介入研究を行う際に、貴重な知見が得られる発表であったため、自信を持って発表した。質問もあり、一生懸命答えた。

また、20日には懇親会に参加し、Inha大学の朴榮信教授の紹介で、韓国の心理学会で情熱的に活動している先生方をご紹介いただき、嬉しかった。加えて、お忙しい中、私の発表のために来韓してくださった指導教官津田彰先生にも感謝を申し上げたい。

以上、韓国心理学会に参加して、自分の研究を発表できたことや、韓国で行われている研究や話題を直接知ることができたこと、韓国で活躍している先生方とお会いにすることができたことなどが大変有意義であった。今後も、日本と韓国で共同研究を進め、両国の学会で発表できることを願った。

最後に、旅費を補助していただきまして、心より感謝を申し上げます。

図1　2010年韓国心理学会の大会場

図2　発表の様子

1　この報告書は帰国後2ヶ月以内に提出して下さい。

国際会議等参加旅費補助金報告書

2010年　9月　15日
（西暦で記入のこと）

日本心理学会理事長　殿

所属機関・職名
国際基督教大学教育研究所・研究員
氏　　名　池　田　　満　㊞

下記のとおり国際会議参加旅費補助金の使用報告をいたします。

会　議　名　称 ※正式名称および 日本語訳	118th Annual Convention of the American Psychological Association 第118回アメリカ心理学会年次大会
公式ホームページURL	http://www.apa.org/convention/
開　催　期　間	2010年8月12日　～　2010年8月15日
旅　行　期　間	2010年8月11日　～　2010年8月17日
開　催　場　所 (国･都市･会場) ※現地名綴りおよび 日本語表記	San Diego Convention Center, San Diego, CA, USA アメリカ合衆国カリフォルニア州サンディエゴ サンディエゴ コンベンションセンター
発　表　者　氏　名 ※全員の名前と所属 日本語表記	池田 満（国際基督教大学教育研究所） 池田 琴恵（お茶の水女子大学人間文化創成科学研究科）
発　表　題　目 ※正式名と日本語訳	Culturally Sensitive Evaluation for Teacher-Burnout Prevention Program in Japan
補　助　金　額	100,000円（内訳：航空券 ）

1　会議プログラムの発表者氏名・題目が記載されたページのコピーを添付して下さい。

2　申請書に記した事項とこの報告書で事項に相違のある場合(旅行期間や発表題目の変更など)は、その旨を該当事項欄に明記して下さい。

国際会議等参加報告書

今回，私が参加したアメリカ心理学会第118回年次大会は，サンディエゴの中心部，サンディエゴ・パドレスのホーム球場であるペトコパークの近くにある，サンディエゴ・コンベンションセンターを中心に，4日間の日程で開催されました。世界でも最大級のメンバー数を誇るアメリカ心理学会の年次大会ということもあり，セッションの数は1500以上，参加者は1万人を越えていたそうです。これだけの数のセッションを開催する会場ですので，会場間の移動距離も長く，1日が終わって歩数計をみると，20,000歩を越えている日もありました。

その中で私は2日目，第27分科会「コミュニティ心理学」のポスターセッションで，学校教員のメンタルヘルス向上プログラムにおいて，コミュニティ主導によるプログラム開発と実施，評価の効果と意義について発表をいたしました。発表した研究のデータは日本で私が行っていた実践に基づいたものですが，University of South CarolinaのDr. Wandermanが発表したエンパワーメント評価理論に基づき，Dr. Wandermanと協働で分析等を進めてきたものです。Dr. Wandermanが発表したエンパワーメント評価とそのツールであるGetting To Outcomes™はCenter for Disease Control & Prevention (CDC) による資金提供により米国内で広く活用されていることもあり，100以上のポスター発表が巨大なホールで同時進行されている中，20人近い研究者が私の発表の前で足を止めてくれました。多くの方は自身のフィールドで実践研究をされているようで，日本の学校という独特な構造を持つ組織での実践の違いなどに強い関心を持ってくださり，有意義なディスカッションができました。

自身の発表以外で特に興味深かったセッションの一つに，Dr. Triandisによる講演会がありました。Dr. Triandisは日本でも「個人主義と集団主義」という書籍が翻訳され知られている，文化心理学の巨人の一人です。Dr. Triandisの講演内容は自身がこれまで数十年にわたって積み重ねてきた研究のアンソロジーのようで，よい意味で“目新しさ”はありませんでした。しかし，それまで“教科書の中の人”であった人を間近に見られる経験は，学会に参加してこそ得られる喜びだと思います（過去のアメリカ心理学会でも，社会的学習理論で知られるDr. Bandurraやスタンフォード監獄実験で知られるDr. Zimbardo，論理療法の創始者であるDr. Ellisらとも話をした経験があります)。

セッション以外では，書籍販売・展示コーナーが興味深く，セッションの合間で合わせて数時間を過ごしました。日本国内では，タイトルに惹かれて洋書を購入しても中身を見てがっかりするというケースが少なくありませんが，50を越える出版社が展示している書籍を，中身を確認して購入できるため，“補助金を頂いたのだし”と10冊以上購入してしまいました。また展示コーナーにはDr. Bandurraが社会的学習理論の実験で実際に使用した“ボボ人形”が展示されており，多くの参加者と同様に写真を撮ることができました。これはまさに“アメリカ心理学会に参加したからこそ得られた経験”だと思います。

加えて，2002年のアメリカ心理学会で知り合って以来の友人とも会うことができました。韓国人である彼女はUniversity of Illinois at Chicagoの博士課程に留学しており，年に1回，アメリカで開催される学会で情報交換を続けています。海外の研究者との交流も意義深いものですが，自分と同年代の大学院生と話し，学問の周辺領域，大学での様子や最近のアメリカでの動向等を知ることができるのも，海外の学会に参加してこその経験の一つです。

私は自身で「年に1回はアメリカでの学会に参加する」ことを目標としておりますが，経済的に余裕があるわけではないので，限られた日程で他の参加者との交流を十分にすることができないこともしばしばあります。そうした中，今回，日本心理学会より参加にかかる費用の助成を頂くことができ，いつもの海外での学会参加以上に有意義なものとすることができました。関係各位に深く感謝いたします。

1　この報告書は帰国後２ヶ月以内に提出して下さい。

国際会議等参加旅費補助金報告書

2010年7月22日
（西暦で記入のこと）

日本心理学会理事長　殿

所属機関・職名　北海道大学大学院文学研究科
修士課程2年

氏　　名　井上　愛弓

下記のとおり国際会議参加旅費補助金の使用報告をいたします。

会議名称 ※正式名称および日本語訳	27th International Congress of Applied Psychology 第27回国際応用心理学会
公式ホームページURL	http://www.icap2010.com/
開催期間	2010年7月11日　～　2010年7月16日
旅行期間	2010年7月9日　～　2010年7月17日 (申請時10日出発としていましたが，飛行機の都合上9日に変更致しました)
開催場所 (国･都市･会場) ※現地名綴りおよび日本語表記	Australia, Melbourne, Melbourne Convention and Exhibition Centre （オーストラリア・メルボルン・メルボルン会議センター）
発表者氏名 ※全員の名前と所属日本語表記	井上愛弓・仲真紀子 （北海道大学文学研究科）
発表題目 ※正式名と日本語訳	Effect of repeated forensic interviews 司法面接の繰り返しの効果
補助金額	100,000円　（内訳　飛行機代として）

1　会議プログラムの発表者氏名・題目が記載されたページのコピーを添付して下さい。

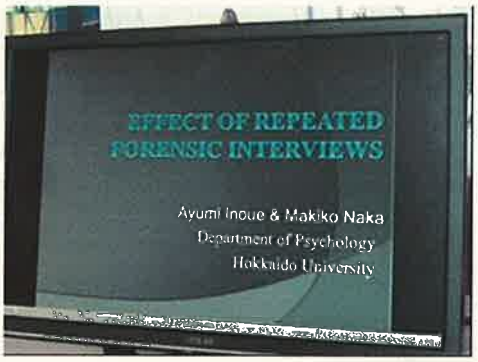
2　申請書に記した事項とこの報告書で事項に相違のある場合（旅行期間や発表題目の変更など）は、その旨を該当事項欄に明記して下さい。

国際会議等参加報告書

1．本大会の特色について

本大会では，多岐にわたる分野で，世界カ国から総勢 3,223 の発表が行われた。発表形態（カッコ内は発表数）も，Workshop（38），Panel（22），Debate & Forum（15），State-of-Art Lecture（27），Opening & Keynote Address（39），Presidential & Divisional Address（37），Symposia（969），Individual Oral（595），Brief Oral（690），Electronic Poster（550）と多く用意されており，様々な分野の多くの研究者と交流する機会が持てた。

2．本大会での成果について



本大会では，“Effect of repeated interview”というタイトルで Electronic Poster による発表を行った。開催期間中，常時ポスターを見ることができるシステムとなっており，数名の先生方から質問やコメントをいただくことができた。また，大会開催後も本システムを利用してポスターを見ることができ，今後も引き続き海外の研究者と情報交換をしていきたいと考えている。

今回，報告者が発表した Psychology & Law の分野では，テロに関する研究を始め，裁判心理に関する研究や，報告者が主に研究の対象としている司法面接に関する研究など，多くの領域の発表があった。幅広い領域の研究発表を聞くことができ，世界各国で行われている Psychology & Law の分野の研究の最新傾向の情報を得ることができた。

特に，司法面接に関する研究は，オーストラリアにおいて日本よりも発展しており，オーストラリアで進められている司法制度やそこへの心理学者の介入など，大変興味深い知見や情報を収集することができた。さらに，Sydney で司法面接の研究を行っており，家庭裁判所や児童福祉施設で多くの forensic report を出している Greg Dear 先生と直接お会いして情報交換をすることができた。オーストラリアでは，司法面接を利用した子どもの虐待防止や非行少年の矯正などに関して，既に組織的な取り組みが進められている。現在，日本においても，子どもの福祉に関して多職種連携を発展させていこうという考えがある。その中で，先進国の情報を得ることができ，このような研究者と交流を持てたことは，大変意味のある成果であった。今後も司法面接研究について情報交換をし，日本における研究についてのアドバイスをいただいていきたいと思う。

また，同じ Psychology & Law の分野で，フォールスメモリに関する研究を行っている Lauren Monds 先生とも情報交換をすることができた。本大会の報告者の目的の 1 つとして，今後の研究を進めるにあたってフォールスメモリを扱っている海外の研究者と交流を持ちたいと考えていたので，大きな収穫であった。これらを，今後の研究の発展につなげていきたいと考えている。

その他として，2016 年の国際大会（International Congress of Psychology）誘致活動の一環として，大会開催中に行われた Japanese night では，スタッフとしてお手伝いさせていただくことができた。世界各国の研究者と交流することができ，このような大会運営側の仕事に少しでも携わることができたことは大変素晴らしい経験となった。

＊最後に＊

日本心理学会の助成により，本大会で有意義な経験をさせていただきました。この場を借りて，日本心理学会会員及び関係者の皆様に心より厚く御礼申し上げます。

1　この報告書は帰国後２ヶ月以内に提出して下さい。

国際会議等参加旅費補助金報告書

2010年　8月　5日
（西暦で記入のこと）

日本心理学会理事長　殿

所属機関・職名 北海道大学大学院　修士課程

氏　　名　名畑　康之

下記のとおり国際会議参加旅費補助金の使用報告をいたします。

会　議　名　称 ※正式名称および 日本語訳	27th International Congress of Applied Psychology (ICAP2010) 第27回国際応用心理学会
公式ホームページ URL	http://www.icap2010.com/
開　催　期　間	2010年　7月 11日　～　2010年　7月 16日
旅　行　期　間	2010年　7月　9日　～　2010年　7月 17日
開　催　場　所 (国･都市･会場) ※現地名綴りおよび 日本語表記	Australia /Melbourne/ Melbourne Convention and Exhibition Centre オーストラリア・メルボルン・メルボルン会議センター
発　表　者　氏　名 ※全員の名前と所属 日本語表記	名畑康之・仲真紀子 北海道大学大学院文学研究科
発　表　題　目 ※正式名と日本語訳	The effect of positive and negative leading post-event information on eyewitness memory within participants 正導・誤導情報が目撃者の記憶に及ぼす影響 - 参加者内比較 -
補　助　金　額	100,000円（内訳　航空運賃の一部）

1　会議プログラムの発表者氏名・題目が記載されたページのコピーを添付して下さい。

2　申請書に記した事項とこの報告書で事項に相違のある場合(旅行期間や発表題目の変更など)は、その旨を該当事項欄に明記して下さい。

国際会議等参加報告書

報告者は、Australia の Melbourne で開催された 27th International Congress of Applied Psychology （ICAP）に 2010 年 7 月 11 日から 16 日まで参加した。

本大会における、報告者の活動内容は大きく以下の３点である。

１．e Presenter システムによる Electronic Poster

報告者は、本大会に Electronic Poster の presenter として参加した。e Presenter システムとは、会場に設置されている PC に、Presenter の Poster が事前登録されており、大会参加者が、大会開催期中、大会終了後にも自由に閲覧できるシステムである。このシステムを利用して発表を行ったことで、自身の研究の知見を多くの人に伝えることができたと考える。

２．研究者との交流

本大会では、海外の研究者との交流を持つことができた。False memory の研究をされているシドニー大学の Lauren Monds 氏とは、大会終了後も E-mail で連絡をとっている。その他にも、多くの研究者との交流を持つことができたことから、本大会への参加は大変有意義なものとなった。また、本大会では自身の研究領域である Psychology & the law の発表を多く拝見することができ、各国の研究の特色や多くの国で共通している研究の流れ（方向性）を感じ取ることができたことは、今後の自身の研究に大きな意味を持つと考える。

３．ICP2016 の日本招致に向けたイベントへの参加

本大会では、2016 年の ICP 招致のため、各国の研究者を招いたイベント（Japan night）のお手伝いをさせていただいた。このイベントへの参加は海外の研究者との交流、コミュニケーションスキルの向上の面からも大変有意義なものであり、とても貴重な経験をすることができた。また、ICP2016 の開催地が正式に日本に決定したことから、報告者の Japan night への参加は、日本における ICP2016 の開催に少なからず貢献したと考える。

1　この報告書は帰国後２ヶ月以内に提出して下さい。

国際会議等参加旅費補助金報告書

2010年　9月　14日
（西暦で記入のこと）

日本心理学会理事長　殿

所属機関・職名

氏　名　　磯村　昇太　　㊞

下記のとおり国際会議参加旅費補助金の使用報告をいたします。

会議名称 ※正式名称および日本語訳	2010 International Conference on "Psychology toward Happiness" 韓国心理学会 2010 年大会
公式ホームページ URL	http://www.koreanpsychology.or.kr/symposium/info.asp?Iseq=&Ipage=1
開催期間	2010年　8月　19日　～　2010年　8月　21日
旅行期間	2010年　8月　18日　～　2010年　8月　21日
開催場所 (国・都市・会場) ※現地名綴りおよび日本語表記	Korea, Seoul, Seoul National University 韓国・ソウル・ソウル大学
発表者氏名 ※全員の名前と所属日本語表記	磯村　昇太　・　丹野　義彦 東京大学大学院総合文化研究科
発表題目 ※正式名と日本語訳	Effects of trait anxiety on aversive learning 嫌悪学習における不安傾向の影響
補助金額	50,000円（内訳　航空券、大会参加費、宿泊費の一部）

1　会議プログラムの発表者氏名・題目が記載されたページのコピーを添付して下さい。

2　申請書に記した事項とこの報告書で事項に相違のある場合（旅行期間や発表題目の変更など）は、その旨を該当事項欄に明記して下さい。

国際会議等参加報告書

日本心理学会から国際会議等参加旅費補助金をいただき、韓国心理学会2010年大会（2010 International Conference on "Psychology toward Happiness"）に参加しました。韓国心理学会2010年大会は主に韓国語で運営されており、その意味では参加に際して労力を要することがありましたが、日本心理学会とのオフィシャルな交流のもとで直接韓国の研究者やその研究内容に触れられたことは非常に貴重な経験となりました。会場となっていたソウル大学はいわゆる一番の繁華街などからは電車で20分ほど離れており、最寄り駅からもバスで行くような立地条件でしたが、その分自然に囲まれ研究や学会会場には適した環境でした。

今回は「嫌悪学習における不安傾向の影響」という題目でポスター発表を行いましたが、ポスター会場が学会会場入り口周辺だったこともあってか想定していたより多くの人と研究内容について議論することができました。全く同じような分野で自分も研究を行っているという人はいませんでしたが、逆に実験パラダイムや実験刺激に関して素朴な意見や貴重な示唆をもらうことができ、有意義であったと感じています。

ポスターセッションでは、やはりハングルで書かれたものを理解するのは困難でしたが、英語で質疑応答することはでき、中々先行研究を探していても遭遇することのない韓国での心理学研究に触れることができたのは韓国心理学会に出席した最も大きなメリットの一つでした。同じ東アジア文化圏ということもあってか思っていた以上に心理学的な問題の設定に共通点が見られ、お互いの言語的な障壁はあったとしても、「近い」国として研究結果の共有などより一層の交流がお互いにとって利益になると肌で感じることができました。

このような貴重な経験をさせていただく直接の要因となったこの度の国際会議参加旅費補助金制度に深く感謝します。

1　この報告書は帰国後２ヶ月以内に提出して下さい。

国際会議等参加旅費補助金報告書

2010 年　9 月　13 日
（西暦で記入のこと）

日本心理学会理事長　殿

所属機関・職名　日本学術振興会特別研究員
東京大学大学院総合文化研究科　博士課程
氏　　名　林　明明　㊞

下記のとおり国際会議参加旅費補助金の使用報告をいたします。

会議名称 ※正式名称および日本語訳	2010 Annual Meeting of Korean Psychological Association International Conference on “Psychology toward Happiness” 韓国心理学会 2010 年度大会
公式ホームページ URL	http://www.koreanpsychology.or.kr
開催期間	2010 年 8 月 19 日　～　2010 年 8 月 21 日
旅行期間	2010 年 8 月 18 日　～　2010 年 8 月 21 日
開催場所 (国･都市･会場) ※現地名綴りおよび日本語表記	Korea, Seoul, Seoul National University 韓国・ソウル・ソウル大学
発表者氏名 ※全員の名前と所属日本語表記	林　明明[1,2]・丹野　義彦[2] [1]日本学術振興会　[2]東京大学大学院
発表題目 ※正式名と日本語訳	Cognitive appraisal of stressor after acute laboratory stress 一過性ストレス後におけるストレッサーの認知的評価
補助金額	50,000 円（内訳　航空券・宿泊費・大会参加費の一部）

1　会議プログラムの発表者氏名・題目が記載されたページのコピーを添付して下さい。

2　申請書に記した事項とこの報告書で事項に相違のある場合(旅行期間や発表題目の変更など)は、その旨を該当事項欄に明記して下さい。

国際会議等参加報告書

2010年8月19日～21日に韓国・ソウルにて開催された韓国心理学会2010年度大会へ参加し、研究発表を行いました。

大会1日目では国際シンポジウム「Psychology Toward Happiness」が行われ、2日目・3日目にポスター発表やシンポジウム、ワークショップが行われました。会場となったソウル大学は大変広いキャンパスを有する大学であり、開放的なキャンパスにて美しい風景を望むことができます。建物が多く、また坂も多いため徒歩で大学内を回ることは骨が折れそうな広さですが、大学内ではバスが通っており、ソウル大学の大学生たちはこのバスを利用してキャンパス内を移動しているのだろうと想像されました。幸い、学会会場となる建物は大学正門から比較的近い場所にあったため、ソウル大学までは地下鉄「ソウル大学入口駅」からバスに乗り、大学正門から会場まで徒歩で移動しました。

初日の国際シンポジウムでは、午前の部と午後の部に分かれ、韓国や中国・日本など各国からの研究者が happiness や well-being などについて発表を行いました。今年の大会は事前登録が900人、当日登録を含めると参加者は1100～1200人を越えると予想されており、初日のプログラムは国際シンポジウムのみだったこともあってか、会場の７３棟ホールは満員となり、席がなくなったために通路に座って発表を聞く人の姿も多く見られました。

自身のポスター発表は２日目の12:00～13:00、８３棟３階にて行いました。ちょうど昼休憩の時間帯だったこともあり、ポスター会場は多くの来場者を迎え混雑しました。自身のポスターに対しても英語で質問を受けたり、指摘・コメントを頂いたりと来場者と交流し、また同じストレス分野の研究者との議論から研究について新たな観点を得ることもできました。ただ、会場は研究分野によって３階と４階の二つの階に分けられていましたが、発表者が他のポスター発表を見に行く際には持ち場を離れなければなりません。日本心理学会大会のように、在席責任時間が分かれていれば、より簡単に興味のある発表を見に行くことができたのですが、担当時間が１時間しかなく、他のポスター会場へ赴くことが困難だったことだけが非常に残念でした。しかし、ポスターを見に来てくださった方々との議論だけでも十分有意義であり、多くのものを得ることができました。

最後になりましたが、この度の韓国心理学会2010年度大会への参加旅費を補助してくださった日本心理学会へ心より感謝申し上げます。

1　この報告書は帰国後２ヶ月以内に提出して下さい。

国際会議等参加旅費補助金報告書

2010年　9月　18日
（西暦で記入のこと）

日本心理学会理事長　殿

所属機関・職名　東京大学総合文化研究科 修士課程
氏　　名　中村 敏健 ㊞

下記のとおり国際会議参加旅費補助金の使用報告をいたします。

会議名称 ※正式名称および日本語訳	Korean Psychological Association 2010 International Conference 韓国心理学会 2010 年度大会
公式ホームページ URL	http://www.koreanpsychology.or.kr/symposium/symposium.asp
開催期間	2010 年　8 月 19 日　～　2010 年　8 月 21 日
旅行期間	2010 年　8 月 17 日　～　2010 年　8 月 23 日
開催場所 (国･都市･会場) ※現地名綴りおよび日本語表記	Korea, Seoul, Seoul University 韓国,ソウル,ソウル大学
発表者氏名 ※全員の名前と所属日本語表記	中村敏健（東京大学総合文化研究科），平石界（京都大学こころの未来センター） 高橋雄介（日本学術振興会・慶應大学文学部），長谷川寿一（東京大学総合文化研究科）
発表題目 ※正式名と日本語訳	Relationships between personality and general trust パーソナリティと一般的信頼の関係
補助金額	50000 円　（ 内訳　航空券代 42960 円 ，ホテル代 8400 円 ）

1　会議プログラムの発表者氏名・題目が記載されたページのコピーを添付して下さい。

2　申請書に記した事項とこの報告書で事項に相違のある場合(旅行期間や発表題目の変更など)は、その旨を該当事項欄に明記して下さい。

国際会議等参加報告書

【概略】

近年学問の国際化、特にアジア間での結びつきの強化の必要性がさけばれている。それに対して日本心理学会では、韓国心理学会・中国心理学会との間に交流協定を結び、アジア諸国間での連携の強化に勤めている。報告者はこのようなアジアにおける心理学会連携プロジェクトの一環として、2010年8月19日から21日にかけて韓国ソウルで開かれたKorean Psychological Association 2010 International Conference においてポスター発表"Relationships between personality and general trust"を行った。韓国心理学会は韓国最大の心理学会であり、今年度は"Psychology Toward Happiness"と銘打ち、国内外から多数の研究者を招聘し、大会が行われた。

【報告者の発表】

報告者の発表テーマ"Relationships between personality and general trust"は社会心理学で議論が行われているテーマに対して、パーソナリティ心理学の視点から考察をした研究であった。そのため、韓国の社会心理学者・パーソナリティ心理学者の双方にポスター発表を聞きに来ていただいた。そのため多くの研究者の方と積極的に議論を交わすことができた。特に韓国のパーソナリティ心理学者の方と日韓でのパーソナリティ尺度の使用方法の異同について議論することができたことは、報告者の今後の研究計画においても大きな示唆を与えることとなった。また今回のポスター発表で文化心理学を専門とする社会心理学者の方からいただいたアドバイスを元に今後の研究計画を修正することになった。このように韓国の心理学者の方々と議論をさせていただいたことが、報告者の研究において大きな財産となった。

【韓国心理学会大会に参加して】

今回の海外渡航においては、若手発表者に海外学会の機会を与えるという方針の元、報告者を含め大学院修士課程の学生にも海外渡航費が援助された。報告者にとっても、今回の韓国心理学会大会は初めての海外学会となり、多くの刺激を得ることができた。このようにキャリアのかなり早い時期に国際会議に参加することができたことは、今後の研究生活において大きな財産になると考えられる。今後も今回の経験を元に、アジア諸国の心理学者との連携を取るとともに、世界に通用する研究を発信していくことができるように、研鑽を積んでいきたい。

この度は、国際会議への旅費補助金をいただき、誠にありがとうございました。

1　この報告書は帰国後２ヶ月以内に提出して下さい。

国際会議等参加旅費補助金報告書

2010　年　8　月　21　日
（西暦で記入のこと）

日本心理学会理事長　殿

所属機関・職名　東京大学大学院総合文化研究科

氏　　名　　飯島　　雄大

下記のとおり国際会議参加旅費補助金の使用報告をいたします。

会　議　名　称 ※正式名称および 日本語訳	2010 Annual Meeting of Korean Psychological Association International Conference on "Psychology toward Happiness" 韓国心理学会 2010 年度大会
公式ホームページ URL	http://www.koreanpsychology.or.kr/symposium/symposium.asp
開　催　期　間	2010　年　8　月　19　日　～　2010　年　8　月　21　日
旅　行　期　間	2010　年　8　月　18　日　～　2010　年　8　月　21　日
開　催　場　所 (国･都市･会場) ※現地名綴りおよび 日本語表記	韓国、ソウル、Seoul National University
発　表　者　氏　名 ※全員の名前と所属 日本語表記	飯島雄大　東京大学大学院総合文化研究科 丹野義彦　東京大学大学院総合文化研究科
発　表　題　目 ※正式名と日本語訳	The relation among meta-cognitive beliefs, intolerance of uncertainty and thought suppression 心配に関するメタ信念とあいまいさ不耐性および思考抑制の関係
補　助　金　額	50,000 円（内訳　旅費として　　）

1　会議プログラムの発表者氏名・題目が記載されたページのコピーを添付して下さい。

2　申請書に記した事項とこの報告書で事項に相違のある場合(旅行期間や発表題目の変更など)は、その旨を該当事項欄に明記して下さい。

国際会議等参加報告書

2010年8月19日から8月21日までの3日間，韓国のソウル大学で開催された韓国心理学会2010年度大会に参加した。韓国は地下鉄網が発達しており，交通の便は良かった。会場となったソウル大学は，ソウル市の南に位置し，広大な敷地の中にいくつもの施設が点在する，大規模な大学であった。韓国心理学会は，ほとんどの発表が韓国語によるものであったが，2009年に日本心理学会と交流協定を結んだように，国内だけではなく，日本や中国からも研究者が参加しており，国際化に向けた風潮が感じられた。

19日はInternational　Symposium　が開催され，韓国の研究者だけではなく，日本と中国の研究者が英語によるシンポジウムを行った。今大会のテーマが“Psychology Toward happiness”ということで，「Happiness」「well-being」を題材とした発表が大半を占めた。私自身の専門では感情・認知のネガティブな側面に注目することが多く，ポジティブな側面はあまり扱わない領域であったので，新しい知見に触れることができた。

私は，20日のポスターセッションにおいて，「The relation among meta-cognitive beliefs, intolerance of uncertainty and thought suppression（心配に関するメタ信念とあいまいさ不耐性および思考抑制の関係）」という題材で発表を行った。韓国の研究者が積極的で，英語による発表にもかかわらず，多くの研究者と活発に交流することができた。自分の研究の問題点，これまで気づかなかった点など，を指摘してもらい，有意義に意見を交わすことができた。

最後に，本会議の出席にあたって旅費の補助をして下さり，このような貴重な体験をする機会を与えて頂いた日本心理学会および関係者の皆様に，深く感謝を申し上げます。

1　この報告書は帰国後２ヶ月以内に提出して下さい。

国際会議等参加旅費補助金報告書

2010　年　　10　月　　19　日
（西暦で記入のこと）

日本心理学会理事長　殿

所属機関・職名　九州大学大学院人間環境学府 修士課程２年

氏　　名　　原口　恵　印

下記のとおり国際会議参加旅費補助金の使用報告をいたします。

会　議　名　称 ※正式名称および 日本語訳	Korean Psychological Association 2010 International Conference (韓国心理学会国際大会 2010)
公式ホームページ URL	http://www.koreanpsychology.or.kr/eng/
開　催　期　間	2010 年　8 月　　19 日　～　　2010 年　　8 月　　21 日
旅　行　期　間	2010 年　8 月　　18 日　～　　2010 年　　8 月　　21 日
開　催　場　所 (国･都市･会場) ※現地名綴りおよび 日本語表記	Republic of Korea, Seoul, Seoul National University 韓国・ソウル・ソウル大学校
発　表　者　氏　名 ※全員の名前と所属 日本語表記	原口恵（九州大学大学院人間環境学府） 山田祐樹（九州大学大学院人間環境学研究院・学術振興会特別研究員） 箱田裕司　（九州大学大学院人間環境学研究院）
発　表　題　目 ※正式名と日本語訳	The effects of affective habituation in the emotion-induced blindness (情動誘発盲に及ぼす感情馴化の影響)
補　助　金　額	50,000 円（内訳　宿泊費，往復航空費）

1　会議プログラムの発表者氏名・題目が記載されたページのコピーを添付して下さい。

2　申請書に記した事項とこの報告書で事項に相違のある場合（旅行期間や発表題目の変更など）は、その旨を該当事項欄に明記して下さい。

国際会議等参加報告書

報告者は2010年8月19日から21日にかけて，ソウル大学で開催されたKorean Psychological Association 2010 International Conference (韓国心理学会大会2010）に参加した。大会期間中は晴れの日が続き，気温も非常に高かったが，参加者は多く，積極的に研究内容についての議論を交わしていたように思われる。学生会員の参加費用は大会期間中の食堂での昼食券がついて40ドルで，比較的安価で学会に参加することができた。

今回の韓国心理学会のテーマは "Psychology toward happiness" であり，19日のシンポジウムでは心理学だけではなく，経済学などを専門にされている各国の研究者による幸福に関する研究についての発表があった。発表者の発表内容なども印象的であったが，質疑応答の際に，質問者が韓国語で質問をしたのを座長が英語にして発表者に尋ねるという光景が目立っていたように思われる。

報告者は20日の12時から13時までのポスターセッションにおいて研究発表を行った。今回の発表題目は "The effects of affective habituation in the emotion-induced blindness (情動誘発盲に及ぼす感情馴化の影響)" で，内容は感情馴化による情動誘発盲の消失について検討したものであった。国外での研究発表は初めてであったため非常に緊張していたが，積極的に話しかけてくれる人が多かった。院生だけでなく，学部生や教授などにも興味深い様子で話を聞いてもらったのが印象的であった。説明や質疑応答は英語で行ったが，中には日本語を話せる人もいたため，比較的落ち着いた状態で研究発表ができたのではないかと思われる。また，今回の発表を通して，改善していくべき課題が多々あることも実感した。たとえば他に日本心理学会から参加した方のポスターは，文章は少なめだが図を効果的に配置しており，すっきりとしていて非常に見やすいポスターであった。英語での研究発表では会話能力も大事だが，より見やすく，わかりやすいように工夫されたポスターを作製することも重要な点であると実感した。

発表をしている際に，運営に関して，セッションの時間や発表賞の投票の仕方など，日本心理学会の大会とは異なる点があることに気付いた。報告者が発表したポスターセッションの時間は12時から13時までの1時間であった。ポスター発表はセッション内の全員が同じ時間帯に発表しており，偶数か奇数かで前半と後半に分けられているということではなかったため，会場内は若干狭く感じられた。また，韓国心理学会の会員には赤いシールが1枚ずつ配布されており，ポスター発表の際，興味深いと思った発表ポスターにそのシールを貼っていた。詳細は確認できなかったが，シールの数が後ほどカウントされ，その数が多い発表者に対しては表彰が行われるということだった。

最後に，このような発表の機会を与えてくださり，参加旅費の補助をしていただいて，心より感謝申し上げます。海外での発表経験は，研究へのさらなる意欲を高めるきっかけになったのではないかと思います。

1　この報告書は帰国後２ヶ月以内に提出して下さい。

国際会議等参加旅費補助金報告書

2010 年　10 月　21 日
（西暦で記入のこと）

日本心理学会理事長　殿

所属機関・職名　東京大学大学院・博士課程 1 年
日本学術振興会
氏　　名　　小林　正法

下記のとおり国際会議参加旅費補助金の使用報告をいたします。

会　議　名　称 ※正式名称および 日本語訳	韓国心理学会
公式ホームページ URL	http://www.psych.or.jp/info/KPA2010.html
開　催　期　間	2010 年　8 月　19 日　～　2010 年　8 月　21 日
旅　行　期　間	2010 年　8 月　19 日　～　2010 年　8 月　21 日
開　催　場　所 (国･都市･会場) ※現地名綴りおよび 日本語表記	韓国・ソウル・ソウル大学
発　表　者　氏　名 ※全員の名前と所属 日本語表記	小林正法　東京大学大学院・日本学術振興会 丹野義彦　東京大学大学院
発　表　題　目 ※正式名と日本語訳	Intentional memory suppression needs cognitive effort to suppress 記憶の意図的抑制に対する認知的努力の必要性
補　助　金　額	50000 円（内訳　旅費及び参加費 55680 円の一部 ）

1　会議プログラムの発表者氏名・題目が記載されたページのコピーを添付して下さい。

2　申請書に記した事項とこの報告書で事項に相違のある場合(旅行期間や発表題目の変更など)は、その旨を該当事項欄に明記して下さい。

国際会議等参加報告書

【概要】

2010年度，韓国心理学会は8月19日から8月21日にかけて，「Psychology toward Happiness」をキーワードに，ソウル大学で開催された。会場となるソウル大学は，地下鉄2号線のソウル大学前からバスで15分ほど移動した場所にある。ソウル大学前駅までは，中心部から30分ほど時間がかかる。電車，バスに関して，電車は日本語で切符が購入でき，主要な駅（明洞など）に到着する際には日本語アナウンスが流れており，日本語での情報提供がない場合も英語でのアナウンスや表記があるために不便はなかった。むしろ，意外なことに現地の方には英語よりも日本語の方が通じるようだった（空港などは英語の方が通じる）。しかしながら，韓国では，タクシーの代金が非常に安いため，往路はタクシーで移動した。40分ほど乗車していたが，それでも代金は18000ウォン（日本円で訳1200円程度）だった。復路はバスと電車を乗り継いだ。また，大会会場では韓国心理学会の方から，日本心理学会から参加する日本人参加者のために英語のできる方を用意していただき，会場でわからないことがあれば，教えていただけ，大変助かりました。

【発表内容】

大会自体は，各日ごとに催しが異なり，1日目は国際シンポジウム，2日目は一般研究発表，3日目は大学院生のためのレクチャーという形になっていた。国際シンポジウムではEd Diener先生（イリノイ大学）などを招いて行われた。私は2日目の12時から13時までポスター発表を行った。ポスター発表は日本の学会と同じく，ボードが並べられる形式であったが，在籍時間の指定はなかった。ポスターサイズは70cm×100cmと指定があったが，実際にはもう少し大きなサイズでも対応可能であった。私は，A0用紙に印刷部分を70cmになるように印刷した後，余白を裁断して，ポスターを作成した。私は，認知の部門で，「Intentional memory suppression needs cognitive effort to suppress」（意図的な記憶の抑制は認知的努力を必要とする）というタイトルで記憶の抑制についての発表を行った。いくつか質問を受け，英語での質疑応答を行った。つたない英語ながらもなんとかコミュニケーションを取ることができたが，自身の英会話能力の向上が必要であることを実感した。他の発表者については，韓国心理学会では，多岐にわたる分野から発表が行われていたものの，多くがハングル語であり，こちらからコミュニケーションを取れなかったのは非常に残念であった。言葉はわからなかったが，精力的な発表や質疑応答を行う場面を何度か目にし，研究へのモチベーションは高まった。

【最後に】

日本心理学会からの助成金援助をいただけたことで，韓国心理学会に参加・発表することができました。このような貴重な機会を与えて下さり，ありがとうございました。

1　この報告書は帰国後2ヶ月以内に提出して下さい。